ゆりかご
園だより

2025.7.1

義務教育開始前の５歳児から小学校１年生にかけての2年間を生涯にわたる学びや生活の基盤づくりの時期ととらえ、その後の学びへとスムーズに接続していけるように国や自治体が取り組んでいる「幼保小の架け橋プログラム」という事業があります。

札幌市は、各区に幼保小連携推進協議会という機関を設け、小学校の校区単位で地域ごとに取り組みを進めており、6月16日（月）にぞうぐみの子どもたちが参加した幌北小学校との交流会もその取り組みの一つです。

先日、小学３年生になった卒園児のRちゃんが保育園の前を通りがかり、事務室にいた私（園長）を必死の形相で窓越しに呼んでいました。どうしたのかなと話しを聞きに外に出るとRちゃんは一緒にいた男の子を指して「この子はお友だちの〇〇くんです。〇〇くんの鼻血がでたので保育園に来ました。」としっかりした口調で事情を話してくれました。私はティッシュを渡しながら「Rが教えてくれたから何があったのかよく分かったよ」というと、「だってRはもう3年生だもん。それぐらい言えるよ」と誇らしげに言っていました。Rちゃんはおそらく下校中に友だちの鼻血が出てびっくりしたものの、近くにゆりかご保育園があることに気が付き、保育園なら対応してくれるだろうと考えて行動を起こしたものと思います。

幼保小の取り組みの中でも「自分で考えて行動する」という子どもの姿は、どんなふうに育ってほしいかを考える際の１つの姿として取り上げられていますが、今回のRちゃんの場合「自分で考えて行動する」の前に「友だちの力になってあげたい」という思いが入っていることが素晴らしいなと思います。

友だちが困っているときに自分はどうするか、それはゆりかごの子どもたちにとっては頭で考えることではなく、経験をベースにしたもっと感覚的なものなんだろうと思います。感覚的というのは経験がなくても行動できてしまうという意味ではなく、保育園時代に友だちとの関わりの中で充分な経験を重ねてきたから今は考えるまでもなく行動できるという意味です。

Rちゃんの行動の源には、少なからず困っている友だちに寄り添う気持ちがあり、その気持ちがあるからこそ「保育園にいけばよい」という結論に至ったのだと思います。個々の違いはありますが、今回のRちゃんの姿を見る限り、ゆりかご保育園での様々な経験を通して培った力が小学校生活の土台になっていると感じられました。

止血を終えて二人を送り出そうとすると「せっかく来たからH先生に会ってもいい？」とRちゃん。在園中は自分が思っていることを誰かに伝えるのもあまり得意ではなかったRちゃんですが、そんなことも言えるようになったんだなと思いながら私は卒園時の担任だったH先生を呼びに向かったのでした。